

Title	『ヘンリー四世』と『ヘンリー五世』を結ぶもの：ハルの英雄的性格と太陽と雲の主題
Author(s)	青木, 啓治
Citation	英文学評論 (1973), 30: 1-26
Issue Date	1973-03
URL	https://doi.org/10.14989/RevEL_30_1
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

『ヘンリー四世』と『ヘンリー五世』を結ぶもの

——ハルの英雄的性格と太陽と雲の主題——

青 木 啓 治

『ヘンリー五世』の冒頭における聖職者達の驚きにみちた贅辞からあきらかなように、ヘンリーは種々の美質をそなえた理想的な王としてこの劇に登場するが、このような性格と、『ヘンリー四世』で墮落した生活を送る王子時代の彼の性格とを調和させるのに、これまで殆んどの評判家が困難を感じてきた。たとえば、この劇のアーデン版の編者である J. H. Walter も「ヘンリーを『賢明になったハル』というのでは、問題をさげることになる」と述べ^①、最近では James Winny がこの問題を扱って、「シェイクスピアは、イーストチープのハルが学問と分別の鑑に変わったと想像することを観客に要求しているのではない」というのである^②。しかし果してこの二つの性格がそれほど結びつかないものであろうか。私には、この問題が解決しないのは、王子ハルに対する批評家達の解釈がすべて誤っているためであるように思われるのである。

ハルの解釈については、七年前、『ヘンリー四世』における構成の問題を扱った際に、私の立場を述べたことがあるが^③、これについては第一部一幕二場における彼の独白がいわば出発点であって、乗場を一つ誤れば、解釈は途方もない方向に進んでゆくのである。

I know you all, and will awhile uphold
The unyoked humour of your idleness :
Yet herein will I imitate the sun,
Who doth permit the base contagious clouds
To smother up his beauty from the world,
That, when he please again to be himself,
Being wanted, he may be more wonder'd at,
By breaking through the foul and ugly mists
Of vapours that did seem to strangle him.
If all the year were playing holidays,
To sport would be as tedious as to work ;
But when they seldom come, they wish'd for come,
And nothing pleaseth but rare accidents.
So, when this loose behaviour I throw off
And pay the debt I never promised,
By how much better than my word I am,
By so much shall I falsify men's hopes ;
And like bright metal on a sullen ground,

My reformation, glittering o'er my fault,
Shall show more goodly and attract more eyes
Than that which hath no foil to set it off.
I'll so offend, to make offence a skill;
Redeeming time when men think least I will.

(Henry IV Pt. 1, I. ii. 219-241)

この独白は、『リチャード三世』の冒頭におけるリチャードの独白と同じ dramatic convention で、ハルの意図や性格、それにプロットの概略を、つとより早く伝えるものである。この強調されていることは、悪い仲間との交際を引立役にして、全く予期されないときに生れ変わり、‘the foul and ugly mists of vapours’から太陽が躍り出るするように世界を驚かしてやろうというもので、その余裕ある態度は彼が最初から大きな器量であることを示しており、彼の真の性格が如何にあらわれて世界を驚かすかを期待するように我々は要求されているのである。A. C. Bradley や Sen Gupta 達は、この独白の中に友人を裏切ろうとする打算的で冷酷な性格をみようとするが、この独白はフォールスタッフ達のことをいっているというよりは、彼等との交際や絶交が手段となる目的について詳しく述べたもので、シェイクスピアは、フォールスタッフを中心とする喜劇が、劇の構成の上からみて、太陽を隠す雲の役割を果すことを最初から我々に伝えているのである。ハルは、ブラッドレーが想像するような嫌な性格として描かれているのではない。作者自身にとって彼は太陽であり、世界を驚かすチャンスが来るまで雲から出してはならないのである。Dover Wilson は、ブラッドレーの批判からハルを救うために、この

独白をハルの性格や意図から切り離し、墮落した王子の成長を道徳劇のバタンの中に辿っていったが、これはシェイクスピアの意図と全く逆である。ハルは道徳劇の主人公であるどころか、作者は彼を最初から偉大な性格として描いているのであり、彼の性格には発展がないのである。この独白をきいた我々の関心が、ハルの放らつた外観に対する他の人物達の反応に向けられるのはやむを得ない。そしてフォールスタッフを含めて、ハルの偉大さや意図を知らない者達の上にアイロニーが生じてくるのである。

最初的一幕と二幕で、ハルとホットスパーの生活が対照的に描かれているが、王子の独白に示された劇の構想においては、ホットスパーの名誉が、ハルの墮落と対照的に強調されればされるほど興味があるのである。王子が完全に墮落したと信じている王は、ホットスパーの武勇を絶賛しながら、ハルが彼の部下となつて叛くと考えている。これに対して王子は、ホットスパーを倒すことを誓いながら次のようにいう。

Do not think so; you shall not find it so;

And God forgive them that so much have sway'd

Your majesty's good thoughts away from me!^⑤

I will redeem all this on Percy's head

And in the closing of some glorious day

Be bold to tell you that I am your son;

When I will wear a garment all of blood

And stain my favours in a bloody mask,

Which, wash'd away, shall scour my shame with it :
 And that shall be the day, when'er it lights,
 That this same child of honour and renown,
 This gallant Hotspur, this all-praised knight,
 And your unthought-of Harry chance to meet.
 For every honour sitting on his helm,
 Would they were multitudes, and on my head
 My shame redoubled ! for the time will come,
 That I shall make this northern youth exchange
 His glorious deeds for my indignities.
 Percy is but my factor, good my lord,
 To engross up glorious deeds on my behalf ;

(III. ii. 129-148)

王子が、*「この」*で彼とホットスパーに対する世評の対照を強調して、ホットスパーを *「this same child of honour and renown」*、*「this gallant Hotspur」*、*「this all-praised knight」* とよび、彼自身をただ *「your unthought-of Harry」* としようのである。しかし彼にはまだこの対照が不充分であって、自分の恥が倍 (redoubled) であり、ホットスパーの名譽が無数 (multitudes) であることを望む。二人の名譽と放らつの対照が著しい程、ハルはやりが

いがあるのである。このような王子の態度は、『リチャード二世』の終幕において、ホットスパーからオックスフォードの競武会のことをぎいた時、女郎屋 (stew) に行つて 'the commonest creature' から手袋をふんどくつてきて、それを 'favour' として身につけ、'the lusiest challenger' を馬から落してやると答えた時の彼の気概を想い出させる。王子は他人と戦うとき、いつも勝利をひきたたすものが必要とするのである。たしかにホットスパーとの対決は、ハルにとって雲から躍り出る太陽のように、世界を驚かす最初のチャンスであつたのである。

そのようなハルの態度は、また、彼がホットスパーとの一騎打ちを申込む時にもみられる。ハルの外観に欺かれて、彼の真の性格を誤解している点でホットスパーも例外ではないが、王子も彼が自分を軽蔑していることを知っていて、ホットスパーの叔父にあたる叛乱軍の使者 Worcester に次のようにいっているのである。

Tell your nephew,

The Prince of Wales doth join with all the world

In praise of Henry Percy : by my hopes,

This present enterprise set off his head,

I do not think a braver gentleman,

More active-valiant or more valiant-young,

More daring or more bold, is now alive

To grace this latter age with noble deeds.

For my part, I may speak it to my shame,
I have a truant been to chivalry;

And so I hear he doth account me too;

Yet this before my father's majesty——

I am content that he shall take the odds

Of his great name and estimation,

And will, to save the blood on either side,

Try fortune with him in a single fight.

(V. i. 85-100)

諸家が指摘するように、ハルのこの言葉は、敵の武勇を心から賞賛する彼の雅量や、自己の弱点を卒直に認める謙虚さを示しているといえるであろう。しかし大切なことは、ハルがここで認め、強調している彼とホットスパリーに対する世評の格差は、彼の独白以来一貫して彼あるいは作者が強調している劇の重要な主題であるということである。彼は世界とともにホットスパリーを激賞しながら、彼が偉大な名誉名声で自分を圧倒してもかまわない、騎士道の怠け者として一騎打ちをやらうというのである。

この場面のハルの態度は、Vernon から絶賛の言葉をひきだすのである。

Let me tell the world,

『ハンリー四世』と『ハンリー五世』を結ぶための

If he outlive the envy of this day,

England did never owe so sweet a hope,

So much misconstrued in his wantonness.

(V. ii: 66-69)

このヴァーノンの言葉は重要である。シェイクスピアはこの人物に雲の裂目からハルの真の性格をのぞかせたのである。あたかも大発見をしたかのようだ。‘let me tell the world’ と彼はいう。それをいいかえれば、放らつた外観に欺かれて、世界はまだハルの真の性格を知らないことを意味するのである。アジンコートの英雄を崇拜する当時の観客は、我々とは異った感情でこの言葉を受けとめたに違いない。‘England did never owe so sweet a hope, / So much misconstrued in his wantonness’ の中に、事実、この劇の主題が圧縮されているのである。

このようにみてゆくならば、第一部におけるハルの筋の面白さは、彼が酒場からにかけていって、騎士道の華とうたわれるホットスパーを倒すことにあることがわかるであろう。我々も彼がそうすることによって世界を驚かすことを期待していたのである。ところがシェイクスピアは、我々のこの期待を裏切って、ハルの勝利を世界から隠したのである。二人は両軍が対する前で一騎打ちをやるのではなく、死んだまねをしているフォールスタッフを除いて誰もいないところで戦い、ホットスパーを殺したと主張して褒賞を求めるフォールスタッフに、ハルは彼の手柄を譲ってやるのである。しかしそれでは、世界を驚かさどころか、父に対して彼の恥を洗い流し、パーシーの ‘glorious deeds’ を彼の ‘indignities’ と交換する^⑧とはできないであろう。このようにプロットのカーブを乱してまでハルの勝利を隠そうとするのは、ここでハルを雲から出すわけにゆかないからであって、

作者が『ヘンリー四世』を一つの劇に収めようとする最初の意図を変更し、この時点では第二部を予定していた証拠となるのである。^⑩ 第一部を書くときシェイクスピアが第二部を予定していたかどうかというこの劇の構成の問題は、Dr. Johnson の時代以来二百年以上にわたって議論されながら、いまだに十分な解決が得られていないが、これは批評家達がウィルソンのようにハルの成長を追うからで、彼等には王子が勝つだけで充分であり、フオールスタッフにハルが手柄を譲る事実が、構成の問題と関係があることに気がつかないのである。この問題の権威である Harold Jenkins は、第二部でハルが酒場に帰るのをみて、シェリューズベリーの勝利者が再び墮落して改心することは堪えられないという。^⑪ しかし雲に隠れた太陽に墮落も更生もあるであろうか。ハルは器量が大きいので、騎士道的美徳と酒場の生活が両立するのであって、そこにこそハルの筋の面白味があるのである。シェイクスピアは、王子の輝かしい勝利と酒場の生活とを矛盾するものとして分けるのではなく、結びつけて考える立場を我々に要求しているのである。

第二部でもハルが独白でのべた意図を持続していることは、父が死ぬ前に王冠を持ち去った動機を追求されて、感動のあまり洩らす彼の言葉からあきらかである。

if I do feign

O, let me in my present wildness die

And never live to show the incredulous world

The noble change that I have purposed!

(Pt. 2, IV. v. 152-155)

この‘the incredulous world’に示すべき‘the noble change’とは、いうまでもなく、第一部の独白でべられた王子の意図である。このようにしてハルは、彼の外観に惑わされた世界の期待や子言の裏をかいて、理想的な王として出現し、太陽は雲からあらわれるのであるが、以上みてきたところから、現代まで批評界を二分してきたハルの成長を追う批評家とハルを批判する批評家の対立は、およそシェイクスピアの意図と関係のないところで争われてきたことがわかるであろう。

『ハンリー五世』に関するいろいろな問題が解決しないのも、王子ハルに対する解釈が誤っているからである。太陽と雲の主題を中心に考えるとき、この劇と『ハンリー四世』との関係は、これまで想像されなかったほど有機的なものとなってくる。まず注目すべきことは、劇的な改心でハルが世界を驚かすことを我々に期待させてきたシェイクスピアは、その驚きを『ハンリー四世』では描かないで、『ハンリー五世』の最初にもってきているところにある。

Never was such a sudden scholar made;

Never came reformation in a flood,

With such a heady currance, scouring faults;

Nor never Hydra-headed wilfulness

So soon did lose his seat—and all at once——

As in this king.

Hear him but reason in divinity,
And, all-admiring, with an inward wish
You would desire the king were made a prelate :
Hear him debate of commonwealth affairs,
You would say it hath been all in all his study :
List his discourse of war, and you shall hear
A fearful battle render'd you in music :
Turn him to any cause of policy,
The Gordian knot of it he will unloose,
Familiar as his garter ;...
Which is a wonder how his grace should glean it,
Since his addiction was to courses vain ;
His companies unletter'd, rude, and shallow ;
His hours fill'd up with riots, banquets, sports ;

(*Henry V*, I. i. 32-56)

王子時代における悪い仲間との墮落した生活と比較して、今や理想的な王となったヘンリーの美徳を列挙しながら、聖職者達が信ぜられないように驚きの言葉をくりかえすとき、これはハルが独白以来意図してきた、彼の

‘noble change’^⑧ ではなく ‘incredulous world’^⑨ の反応であって、『ヘンリー四世』を貫いてきた雲に隠れた太陽の主題は、ここではじめて完結するのである。このようにみれば、ハルの独白とこの聖職者達の言葉は、二つの劇を結びつける鏝の両端の釘の役を果すのであるが、すでにふれたように、批評家達は、この理想的な王の肖像と王子時代の彼の性格とを調和させるのに困難を感じてきた。これは彼等の殆んどが、ハルは実際に墮落していること、彼の成長を辿ってきたからであり、彼等にとってヘンリーの急激な変化は、ただ賢明になったハルということと説明できないあるものを含んでいるのである。

また James Winny は、『ヘンリー四世』のハルは、自分自身の秘密の目的のために、美德を隠して放つて装っているのに対し、『ヘンリー五世』においては、冒頭のカンタベリー達の言葉からみて、王子ハルは、本当に墮落していたのが、即位と同時に奇蹟的な変貌をとげるといふあの伝統的な見方に、作者自身が戻っているというのである。この批評家の場合も、ハルの独白の解釈に問題があるのである。彼は放つて装う王子の動機を心理的に説明することが困難であるとして、独白で述べられている目的を無視し、劇の ‘imaginative design’^⑩ の中に、篡奪者の父を批判しようとするハルの立場を述べているが、ハルの意図がわからないようでは、彼の独白とカンタベリー達の驚きとの関係に注目することはできないのである。

聖職者達の話では、種々の学問に精通したヘンリーの、理想的な王としての新しい一面が語られている。これはリアリズムの立場からみるとおかしいかも知れない。しかしカンタベリー達はその問題をとりあげ、悪い仲間達といつもつきあっていてどうして学問をする余裕があったのであろうと疑いながら、今の世に奇蹟は存在しないから、それ相応の原因があるに違いないというとき、作者は、これも雲に隠れていたヘンリーの美質の一つとして、そのまま受入れることを要求しているのである。我々はあまりリアリズムの立場からせんさくしてはなら

ない。王子ハルの筋に意図されたものは、結びつかないものが結びつく面白さであったからである。

二つの劇の関係をみる上で次に私が注目したのは、劇の最初からこのようにヘンリーは完全に成長した性格として登場し、以後はその働きが示されるだけで、彼の性格に発展がないということである。これは『ヘンリー四世』でハルが最初から太陽として描かれ、性格が固定しているのと同じである。二つの劇に共通した作者の態度は、アジンコートの英雄を崇拜する当時の民衆の立場に近いもので、『ヘンリー四世』の中に迎ってきた構成のボタンは、太陽と雲の主題が続くことによって、この劇でもくりかえされている。今度はフランスの皇太子が、ヘンリーの偉大さを知らないからである。

ヘンリー王がおも墮落した生活を続けていると誤解して彼にテニスボールを贈ったフランスの皇太子は、使者を通じて嘲りの言葉を伝えるが、それに対するヘンリーの言葉は、王子時代の自分をふりかえって述べたもので、二つの劇の関係をみる上で重要である。

we understand him well,

How he comes o'er us with our wilder days,

Not measuring what use we made of them.

We never valu'd this poor seat of England;

And therefore, living hence, did give ourself

To barbarous licence; as 'tis ever common

That men are merriest when they are from home.

But tell the Dauphin I will keep my state,
Be like a king and show my sail of greatness
When I do rouse me in my throne of France :

For that I have laid by my majesty
And plodded like a man for working-days, ^⑤

But I will rise there with so full a glory

That I will dazzle all the eyes of France,

Yea, strike the Dauphin blind to look on us. ^⑥

(L. ii. 267-280)

まず注目すべきは、最初の四行である。ハルの education theme を追求する批評家達には、‘what use we made of them’は、将来アジンコートで指揮する身分の低い者達を直接知る機会を得たことを意味してきたが、雲に隠れた太陽の主題を追求してきた我々には、そうでないことがわかるのである。ヘンリーは、宮廷をはなれて放とうに耽った理由をのべて、‘We never valu'd this poor seat of England’^⑦と云う。ハルの成長を辿ってきたウィルソンやアーデン版の編者にとっては、これは事実と相違する筈で、彼等はその言葉をアイロニカルにとっているが、^⑧ヘンリーは嘘をついているのではない。我々は独白をきいた最初から、王子をこのような大きな器量として予定していたのである。今ここで注目すべきは、ヘンリーが再び自らを太陽にたとえて、あのハルの独白にきける主題をくりかえして云うことである。‘barbarous licence’や‘plodded like a man for working days’

とらした驕傲な生涯を以てに「我は I will rise there with so full a glory' 'I will dazzle all the eyes of France' 'strike the Dauphin blind to look on us' とらした眩しう太陽のイメージと対照をなして、さういふ雲から太陽が躍り出て世界を驚かすあの独自のイメージを想起させるのである。そしてこの劇に受けつがれた太陽と雲の主題は、一幕四場の Dauphin と Constable との対話にならうて、より明確なカタチをとってあらわれぬのである。

Dau. . . my good liege, she (England) is so idly king'd,

Her sceptre so fantastically borne

By a vain, giddy, shallow, humorous youth,

That fear attends her not.

Con. O peace, Prince Dauphin !

You are too much mistaken in this king.

Question your grace the late ambassadors,

With what great state he heard their embassy,

How well supplied with noble counsellors,

How modest in exception, and withal

How terrible in constant resolution,

And you shall find his vanities forespent

Were but the outside of the Roman Brutus,

Covering discretion with a coat of folly;

(II. iv. 26-38)

ヘンリーがまだ墮落していると信じこんで彼を軽蔑している皇太子を諫めて、Constable は、'O peace, Prince Dauphin! / You are too much mistaken in this king' とたしなめながら、ヘンリーの王子時代に「ごうごう」彼の以前の放埒三昧は、ローマのブルータスの外観同様、思慮分別を愚行の衣で掩っていたにすぎなかった」というのである。これはとりもなおさず『ヘンリー四世』二部作を貫いてきた雲に隠れた太陽の主題であるが、いま二人の対話をきく我々は、ハルを軽蔑しているホットスピーに、ヴァーノンが王子の偉大さをあきらかにするあの場面を想い出す。フジんコートの英雄を崇拜する当時の観客は、Vernon の言葉と同様、Constable のこの言葉を、現代の我々とは異った感情で受けとめたに違いない。

決戦の前におけるイギリス軍の状態は、フランス軍の使者 Montjoy にヘンリー自身が語るように、病気のために死者が続出する最悪の状態であった。

to say the sooth,

Though 'tis no wisdom to confess so much

Unto an enemy of craft and vantage,

My people are with sickness much enfeebled,

My numbers lessen'd.....

(III. vi. 148-152)

自分の不利になるにもかかわらず、敵の使者に味方の状態を語る卒直な態度は、Shrewsbury の決戦の前に、叛乱軍の使者 Worcester に、自分が騎士道の怠け者であったことを卒直に認めるハルの態度を想起させる。

第四幕のはじめにおける Chorus も、決戦前夜における両軍の状態を対照的にのべている。

Proud of their numbers, and secure in soul,
The confident and over-lusty French
Do the low-rated English play at dice;
And chide the cripple tardy-gaited night
Who, like a foul and ugly witch, doth limp
So tediously away. The poor condemned English,
Like sacrifices, by their watchful fires
Sit patiently, and inly ruminate
The morning's danger, and their gesture sad
Investing lank-lean cheeks and war-worn coats
Presenteth them unto the gazing moon

So many horried ghosts.

.....

Upon his royal face there is no note

How dread an army hath enrounded him ;

Nor doth he dedicate one jot of colour

Unto the weary and all-watched night ;

But freshly looks and overbears attainit

With cheerful semblance and sweet majesty ;

That every wretch, pining and pale before,

Beholding him, plucks comfort from his looks.

A largess universal like the sun

His liberal eye doth give to every one,

Thawing cold fear,.....

(IV. i. 17-45)

ここで大切なのは、そのような状態のイギリス軍の中でヘンリーが果たす役割である。決戦前夜の闇は、*'a foul and ugly witch'* にたとえられ、消耗したイギリス軍を幽霊のようにみせる気味の悪い不吉な闇であるが、ヘンリーは、そのような闇の中で、イギリス軍に慰みと勇気を与える太陽なのである。この闇と太陽の関係は、ハル

の独白は 'a foul and ugly mists of vapours' を破って躍り出る太陽と雲との関係に似ていて、その類似した表現からも^⑤ シェイクスピアがここでハルの独白を想い出していたことはあきらかなように思われる。Winny は、この Chorus の言葉や、四幕二場のイギリス軍を軽蔑する Grandpré や Constable の言葉の詩の力が、Agincourt の重要性を減するやうにいうけれど、それは逆である。ホットスパーと比較して、ハルの墮落が強調されるほど彼の勝利が引立つように、イギリス軍の衰えた状態が強調されるほど、それが引立て役となつて、ヘンリーの勝利は輝くのである。当時の観客がこの戦の結果を知っており、アジンコートの英雄を崇拜していたことを考えれば、これは当然のことであらう。

両軍の優劣の差は、Exeter と Salisbury の対話で語られている。

Exe. There's five to one; besides, they are all fresh.

Sal. God's arm strike with us! 'tis a fearful odds.

(IV. iii. 4f.)

しかし Westmoreland 伯が本国から援軍をのぞむのをきいたヘンリーはいう。

No, my fair cousin:

If we are mark'd to die, we are enow

To do our country loss; and if to live

『ヘンリー四世』と『ヘンリー五世』を結ぶの

The fewer men, the greater share of honour.

God's will! I pray thee, wish not one man more.

.....if it be a sin to covet honour,

I am the most offending soul alive.

No, faith, my coz, wish not a man from England:

God's peace! I would not lose so great an honour

As one man more, methinks, would share from me,

For the best hope I have. O do not wish one more!

Rather proclaim it, Westmoreland, through my host,

That he which hath no stomach to this fight,

Let him depart; his passport shall be made,

And crowns for convoy put into his purse:

(IV. iii. 20-37)

ヘンリーは、一兵の援軍を望むどころか、逆に味方の数をへらそうとするのである。我々は、ここで、ホットスパークとの対決を意識したときにみられたハルのあの気概ある性格を想起するであろう。^⑧ 'the fewer men, the greater share of honour' と彼はいう。王子時代のヘンリーは、他人と戦う場合に勝利を引立たすものをつつも必要としたが、ヘンリーがここで立たされている最悪の条件は、フランス側の軽蔑とあいまって、彼の勝

利を輝かす引立て役となるのであり、『ヘンリー四世』を貫ぬいてきた太陽と雲の主題は、アジンコートにおいてクライマックスに達するのである。

ヘンリーの気概ある性格は、太陽と雲の主題と表裏一体をなして二つの劇を貫ぬいている最も重要なものであるが、批評家達がこれに注目しないのは何故であろうか。すでにみてきたところからあきらかなように、出発のときから彼等が乗る汽車を間違えたためである。

ハルの独白が『リチャード三世』の冒頭におけるリチャードの独白と同じ dramatic convention であることを最初に指摘したのは、J. D. Wilson 自身である。だが彼は、この独白をリチャードの独白と同じように扱わないで、ハルの意図や性格と関係のない Prologue のようなものと解釈し、道徳劇のパタンの中に、墮落した王子の成長を辿っていったのである。このようなウィルソンの立場は、ハルの独白に友人を裏切ろうとする冷酷な性格をみるブラッドレーに対抗したものであるが、すでにみてきたところからあきらかなように全く根拠のないので、問題を解決するどころか、長いあいだ批評界を混乱させる原因となっているのである。

しかし大切なことは、ウィルソンが間違っているから、ブラッドレーが正しいということにはならないということである。この劇で太陽と雲の主題が追求されていることを考えれば、ハルに対する作者の批判があるとは思われない。ブラッドレーや Sen Gupta は、ハルの独白が convention であって、そこでのべられた王子の意図は、作者自身の構想でもあることを知らなかったのである。彼等はフォールスタッフを愛し、ハルを嫌うけれども、劇の構成の上からみて喜劇の部分が太陽を隠す雲の役割を果し、作者の意図するものが、英雄の偉大さを世界が知らない面白さであることに気がついていたら、フォールスタッフに対してそれほど感傷的になることはできなかったであろう。

ハルの解釈をめぐるブラッドレーとウィルソンの対立は、これまで批評界を二分してきたが、王子を批判したり、あるいは彼の改善の過程をたどってゆくこの二人の立場は、ともにシェイクスピアの意図とは無縁のものである。我々はまず、ハルの筋の面白さを理解することからはじめなければならないといえるであろう。『ヘンリー四世』の場合、ハルの真の性格を知らない者達の上にアイロニーがあるのであるが、批評家達は、王子を心理的に追求するために、そのアイロニーを感じることができないのである。ハルの独白は、彼が雲に隠れた太陽で、性格が最初から固定し、発展しないことを示しているが、そのような formal な構成において、彼の動きを心理的に追求しても意味があるであろうか。これは『ヘンリー五世』についてもいえることなのである。

すでに述べたように、ヘンリーは完全に発達した性格としてこの劇に登場し、以後はその働きが示されるだけで、性格に発展はないのである。その上、太陽と雲の主題がこの劇でも続いていて、アイロニーは、ヘンリーの偉大さを知らないフランスの側にある。このような劇で、作者が、ヘンリーの体験を興味をもって描いた筈はないのであって、王の中に passion と reason の葛藤をみる Derek A. Traversi や、彼の心の動揺を辿ってゆく Winny などの心理的アプローチが意味があるとはいえない。ましてやブラッドレーがヘンリーを批判するようなことをこの劇で作者が意図しているとは、『ヘンリー四世』の場合と同じように、全く考えられないのである。彼がいうようにヘンリーは 'vile politician' の息子であるどころか、それとおよそ対蹠的な、卒直で名誉を重んずる性格なのである。

ヘンリー王に対するブラッドレーの批判をウィルソンは一つ一つ弁護しているが、『ヘンリー五世』については、彼の解釈の方が正しいといえるであろう。しかし『ヘンリー四世』のハルに対するウィルソンの解釈は、シェイクスピアの意図と全く逆であって、批評界を誤った方向に導いた彼の責任は大きいのである。いわゆるハル

の 'education theme' や 'timely reformation' という言葉に象徴されるこの批評家の立場は、喩えていえば、大阪から東京に行くのに下関の方へゆく下りの汽車に乗るようなもので、その方向で如何に努力しても意味がないのである。作者の意図とこのように矛盾する解釈が長いあいだ批評界で支持されてきたことは、現代のシェイクスピア批評の体質に疑問を抱かせるが、そのような解釈が学界を支配している限り、フォールスタッフを愛する者達との無意味な論争は続くであろうし、『ヘンリー四世』における構成の問題と同様、この劇と『ヘンリー五世』との関係をめぐる問題も永久に解決しないように思われるのである。

(本稿は、昭和四十七年十月二十九日に行われた第十一回シェイクスピア学会において発表したものである。)

[注]

- ① J. H. Walter (ed.), *King Henry V*, 'New Arden Shakespeare' (Methuen, 1954), p. xviii.
 - ② James Winny, *The Player King*, (Chatto & Windus, 1968), p. 175.
 - ③ 『英米文学』研究と鑑賞(大阪府立大学英米文学研究会 第十三号、一九六六年)頁八十九―百二十五。
 - ④ A. C. Bradley, *Oxford Lectures on Poetry*, (Macmillan, 1950), p. 254.
 - ⑤ S. C. Sen Gupta, *Shakespeare's Historical Plays*, (Oxford U. P., 1964) p. 128.
- またフォールスタッフの魅力もあきらかにたえず、王子の仲間が追刺を好んでする悪党であることを知らされるこの場面において、これらの批評家達は、ハルの独白でそれは悪感情をいだくのであろうか。
- ⑥ J. D. Wilson, *The Fortunes of Falstaff*, (Cambridge U. P., 1953), p. 41.
 - ⑦ ハルの中傷者達の行為は、直接アクションに示されていないが、彼等の存在は、独白でのべられた王子の意図を明らかに面白くする意味で重要である。同じ場面の十八行から二十八行にかけて、すでに王子が王に対して、彼を中傷者の 'smiling pick-thanks' や 'base newsmonger' についで不平をのべているが、これが決してその場かぎりの言のがれでないことは、そこにおける事実と作り話を区別しようとする

彼の態度からあきらかである。なお、王子の中傷者に対する言及は、五幕四場五十一行と五十二行にもみられる。彼が Douglas の刃から父を救った際、「自分の命をいくらか大切にしている」のがわかったという王の言葉をきいて、彼は、「O God! they did me too much injury! / That ever said I hearten'd for your death」と言うのである。この劇で、纂奪者は、息子の真の性格を知らなうと云うて罰せられるのであるが、中傷者が彼の理解を妨げているのである。

⑦ *Richard II*, V, iii, 15-18.

これは悪く仲間を引立て役にして劇的な攻心を図ろうとするハルの独白の趣旨と同じことをしているのである。

⑧ 王子が、ホットスプーンを殺したというフォールスタッフの嘘に調子をあわせることを約束して

For my part, if a lie may do thee grace,

I'll gild it with the happiest terms I have.

(Pt. 1, V, iv, 161f.)

とのく、次の場面で、ハルは王に向って、あたかも他人がホットスプーンを殺したかのように

'The noble Percy slain, and all his men

Upon the foot of fear with the rest

(V, v, 194f.)

と報告する。しかも不思議なことに、王は誰がホットスプーンを殺したか知らうともしないのである。

⑨ Pt. 1, III, ii, 146.

⑩ なおこの劇をなする構成の問題に關する詳しく考察については、前述の『英米文学』の中の拙稿「『ヘンリー四世』における構成の問題」を参照されたい。

⑪ Harold Jenkins, 'The Structural Problem in Shakespeare's *Henry The Fourth*', (Methuen, 1956), pp. 3-5.

⑫ Pt. 2, IV, v, 154f.

⑬ James Winny, *op. cit.*, p. 175.

⑭ See *ibid.*, p. 136.

ウニニーによれば、悪徳を養って善徳を隠そうとするハルの独白の意図は、王の權威の背後に過去の不名誉な記録を隠そうとする纂奪者

Bolingbroke の態度と逆な関係にあつて、この批評家は、そこに父に対するハルの批判をよみとるのであるが、王子が父を道徳的に見下げている証拠は何もないのである。ウィニーがハルの独白にみる作者の構想は、劇を最後まで読んで考えたもので、はじめてこの独白に接する観客や読者のおよそ想像もつかないことである。ハルが独白でのべている放らつてを装う理由は、この批評家が考えるようにむつかしうつひななう。それは、'the commonest creature' の手袋を 'favour' とつて身につけ、競武会や 'the Justest challenger' を馬から落してきんぐ (*Richard II*, V. iii. 15-18) とううのと同つたで、現代流にいえば、中学生が実力考査でトップになつて目立つために、学校の成績をわざと落第点にしてきやうというやうなものである。気概のある者なら誰でも、これに類することを考えたことがあるであらう。この独白から得たハルの意図や性格に関する知識を基にして、以後の劇の展開をみなければならぬのに、明白にのべられた意図を無視して、その独白の中に勝手な想像をよみ込むのは、駅で乗る汽車を不注意に選ぶのと同じほど危険なことである。

And in the closing of some glorious day

Be bold to tell you that I am your son,

When I will wear a garment all of blood,

And stain my favours in a bloody mask,

Which, washed away, shall scour my shame with it. (Pl. I, III. ii. 133-7)

これは父に向つて、ハットスマーを倒すのを誓うハルの言葉であるが、後半における血と血を洗い落すイメージに、ウィニーは、リチャード殺害の父の罪が象徴されてくるやうにみる (See *Winnys op. cit.*, p. 144)。しかして自らから判断すると、ハルは明らかに Bolingbroke の息子であることを名著名なこととしてのべているのであつて、ウィニーの解釈はこつけりに思われる。パーシーに尻尾をふつてついでゆく憶病者と疑われて、ハルがこのように反発したもので、血に掩われた服と顔のイメージは、彼の豪勇を象徴するものである。王子を最初から偉大な性格として捉えるこの批評家の立場には、他の批評家にみられない正しい解釈への萌芽があるが、ハルが父を批判しているところの解釈は誤りである。

⑭ *Henry V*, I. i. 67-69.

⑮ 'For that...' 以下は『Henry V』五五 (We never val'd this poor seat of England / And therefore, living hence, did give oneself to barbarous licence) の一節に考へるべきである。王子が独白で、悪く仲間との生活を続ける理由をのべたとき、フランスの征服のことにについては言及しなかったが、そこでのべられた太陽と雲の主題やハルの気概ある性格は、シェイクスピアの想像の中で、すでに

